

1. はじめに

技術の急激な発展、および高齢化社会への移行にともなって、40歳を過ぎてから職種転換をせざるを得ない場合も多くなり、中高年者に対する教育訓練の必要性が高まっている。

しかし、一般に中高年になってから職業経験を生かせない、新しい技能の習得にはかなりの困難を伴うとも言われており、中高年者がどのような学習上の困難に遭遇するのか、その原因は何かを吟味した上での、中高年訓練のなんらかの改善、工夫が要望されている。

このような課題に対して、高齢化がわが国よりもはやく始まった英国はじめ諸外国では十数年前から研究がおこなわれている。また、最近になってわが国でも中高年者の教育訓練をめぐる研究がみられるようになっている。

従来、行なわれてきた中高年者の教育訓練に関する研究を概観すると、おおよそ、次の四つのアプローチがあるように思われる。

第1は、中高年者、成人がおかれた生活状況から成人学習者の諸特性⁽¹⁾を検討する、社会教育の立場である。(諸岡和房：1975、花香実：1972、Hodgkins 1971) 第2は、加齢による心身機能の低下と職業能力の低下とはイコールではなく、一般に信じられているほどには職業能力は低下しないと主張する、労働科学の立場である。(齊藤一：1979、松山美保子：1977) 第3は、加齢が技能学習に及ぼす影響を実験心理学の立場より検討したものである。(Welfold：1977、Bromley：1974、熊谷信順：1972) 第4は、中高年者の教育訓練の方法を学習心理学の立場から論じたものである。(Belbin：1958：1964：1972：1965：1969、Davies：1971)。

これらの四つの立場は独立に論じられており、教育訓練の実施者側から総合されているものではない。この四つの立場の中で、第4のアプローチは中高年者が遭遇する学習上の困難点(learning difficulty)を検討しているのは注目に値する。さらに、この立場の研究者は、年齢段階によって学び方には相違

があり、成長期の人に適した教授法⁽²⁾が必ずしも中高年層の人に適した方法とはならないと主張している。そして、中高年者の特性にあった教授法をもちいれば、中高年者の教育訓練は成功することを示唆している(Davies、1971)。

そこで、本研究では学習心理学の立場より、公共訓練(能力再開発訓練課程)の場において中高年訓練生がどのような学習上の困難を感じているか、その実態を把握することを目的とした。さらに、その学習上の困難点を克服させるにはどのような教え方の工夫をしたらよいかを考察する。

具体的な目標は次のごとくである。

- ① 中高年訓練生の全般的な学習状態を知る。
- ② 実習場や教室で感じている学習上の困難点を描写する。
- ③ 中高年訓練生の教え方への要望を知る。
- ④ 担当する指導員の教え方の工夫点を把握する。
- ⑤ 学習困難点を克服する方策について考察し、指導上の留意点を整理する。

(調査方法)

調査対象は県所管職業訓練校、6訓練校、15クラスの能力再開発訓練課程に在籍する、40歳以上の訓練生⁽³⁾である。調査人数は58名⁽⁴⁾である。グループ面接および個人面接を約2時間実施し、訓練生の生の声を集録した。

また、中高年訓練生と若年訓練生との意識の相違を把握するために、アンケート形式の調査も実施した。

さらに、中高年者と若年者との両方を指導した経験のある指導員から、中高年訓練生の学習状況について聴取した。面接人数は18名である。

調査時期は昭和53年1月から昭和55年3月の間の随時である。